

東日本大震災被災地の スタディツアーにおける語り部の重要性

Importance of the storyteller in the study tour of
the Great East Japan Earthquake disaster area

が
ん
鷹 咲 子
Sakiko, GAN

要 旨

2011年3月の東日本大震災によって大きな津波被害などを受けた被災地では、未だに約25万人が避難生活を送っている。多くの被災地がある東北地方の観光地への旅行需要の落ち込みも続いている。被災地を巡る「復興応援ツアー」が企画されているが、これに対しては、「観光プログラムとして正しいことなのか」という疑問も提起されている。しかし、阪神・淡路大震災の伝承を行う語り部の活動を分析した先行研究を踏まえ、東日本大震災被災地を訪問するスタディツアーにおける語り部の重要性について述べたい。また、被災地ツアーの課題として、リピーターが少ないことも指摘されている。被災者による語り部活動、歩く観光など、癒されたり、楽しみを感じたりしながら、災害の教訓が次世代に伝わるような観光の仕組みづくりが必要である。

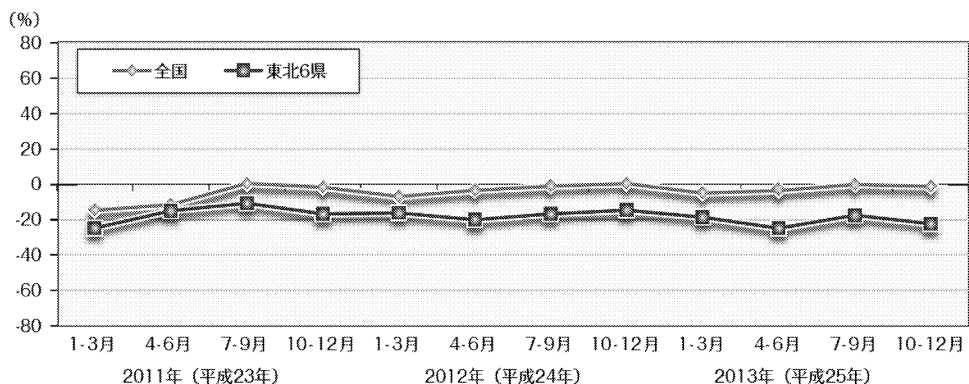
キーワード：被災地観光、語り部、東日本大震災

I. 東日本大震災の被災地の状況

2011年3月の東日本大震災によって大きな津波被害などを受けた被災地では、未だに約25万人が避難生活を送っている¹。また、多くの被災地がある東北地方の観光地への旅行需要の落ち込みも続いている(図表1・2)。

東日本大震災被災地のスタディツアーにおける語り部の重要性

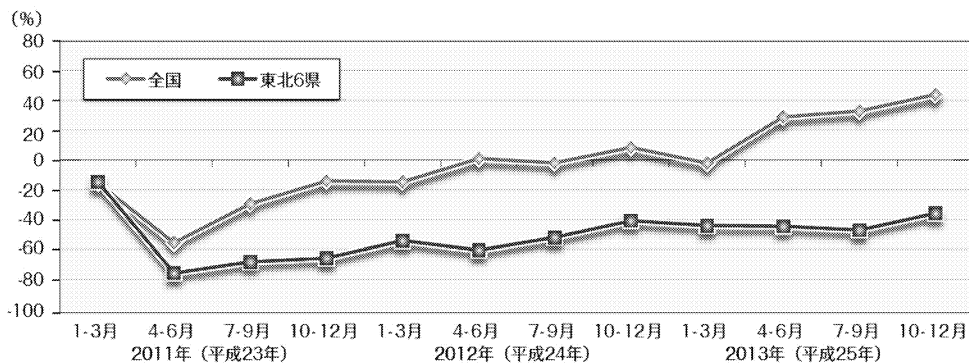
図表1 東北地方の観光地への旅行需要の落ち込み



注1) 観光庁「宿泊旅行統計調査」による。
 注2) 2010年(平成22年)同月比の算出にあたり、1～3月は従業員10人以上の宿泊施設の実績、4～12月は全施設の実績を使用。
 注3) 2010年(平成22年)～2012年(平成24年)の数値は確定値、2013年(平成25年)の数値は暫定値を使用。

(出所) 国土交通省「平成26年版 観光白書」31頁

図表2 海外からの宿泊客の落ち込み



注1) 観光庁「宿泊旅行統計調査」による。
 注2) 2010年(平成22年)同月比の算出にあたり、1～3月は従業員10人以上の宿泊施設の実績、4～12月は全施設の実績を使用。
 注3) 2010年(平成22年)～2012年(平成24年)の数値は確定値、2013年(平成25年)の数値は暫定値を使用。

(出所) 国土交通省「平成26年版 観光白書」32頁

II. 被災地を巡る「復興応援ツアー」

このような状況において、被災地を巡る「復興応援ツアー」が企画されている。公益社団法人助けあいジャパン²のホームページでは、「助け合いの入り口」に「ボランティア」「買って応援」「寄

付・投資・NPO支援」と並んで、「旅して応援」として、さまざまな「復興応援ツアー」が紹介されている³。その中には、大手旅行会社が企画するツアーもあれば、「三陸被災地フロントライン研修⁴」のように震災で大きな被害を受けた三陸鉄道の社員が案内するスタディツアーもある。語り部による「津波体験講話」「震災の体験談」が盛り込まれていたり、語り部タクシーで被災地を回ったりする企画もある。

東京都は公益財団法人東京観光財団を通じて、都内旅行事業者が企画する福島県への宿泊または日帰り旅行商品を「被災地応援ツアー」に指定し、この旅行商品に申込みを行った旅行者に対して、申込時に3,000円（宿泊1人1泊当たり、2泊限度）、又は1,500円（日帰り1人1回当たり）の旅行代金の割引をしている⁵。

「観光白書」においても、「多くの人々が被災地を訪れることは、そのこと自体が復興支援につながり、特に子供たちなどの若い世代が、修学旅行やボランティアで被災地を訪れることは、将来世代に震災の記憶を受け継いでいく観点からも重要である」、「太平洋沿岸エリア及び福島県の旅行需要回復と、人的交流の拡大に対する支援を行い、震災の記憶の伝承のための語り部ガイド等の人材の育成、学習プログラムの整備といった受入体制の整備や、ボランティアツアー等地域のニーズに合致した旅行商品の造成等の取組を、地域の実情を踏まえつつ、官民一体となって推進していく」との記述がある⁶。

しかし、被災地への観光や語り部について、「自分にも出来る事で協力をしようと改めて思っています」「本当は話したくない、思い出したくないことではないでしょうか。それを越え（越えようとして）たくさんの方に話されている語り部の方々に感動します。1日も早くまず町が復興して欲しい。」という意見がある一方、「思い出したくないようなことを語っている姿をととても痛々しく拝見しました。本当に観光プログラムとして正しいことなのか、疑問もあります。」という批判もある⁷。この疑問・批判については、どのように考えたら良いのであろうか。

Ⅲ. 語り部が伝える被災地の物語

災害・事故、戦争など、広範囲かつ永続的に大きな社会的影響を与える出来事については、その出来事や出来事に伴う体験を記憶・保存・伝達することを目的とした施設が建設されることが多い⁸。

例えば、「北淡町震災記念公園（野島断層保存館）」は、1995年1月17日の阪神・淡路大震災のメモリアル施設として、震災の3年後の1998年に開館した。ここでは、高齢者を中心に100人以上の地元住民が雇用され、さらに、地元住民が震災の語り部、あるいはスタッフとして記念公園の運営に積極的に関与している。

東日本大震災被災地のスタディツアーにおける語り部の重要性

また、同じく阪神・淡路大震災のメモリアル施設である神戸市の「人と防災未来センター」は、2002年度にオープンし、2013年度までに延べ585万人が来館している⁹。ここでも、50歳以上の仕事を退職した人や子育てを終えた被災者が語り部ボランティアや運営ボランティアとして活動している¹⁰。

前述の語り部タクシーのドライバーも「震災のことを風化させないように、語り継ぐことが私の使命だと思っている。お客様には、津波が来たら逃げるという教訓を忘れず、どうか震災に関心を持ち続けてほしいのです」¹¹と述べている。災害によって家族や住まいを失った被災者が、「震災を忘れて欲しくない。地震を体験していない人にも、自分の経験を語り継ぎたい」として、語り部として被災体験を話すことは、被災者自身の「心のケア」にもなる場合もあるという。また、被災体験を語る場所が、新たな交流や出会いの場になることもある¹²。

阪神・淡路大震災のメモリアル施設の来館者は、関西近郊に在住し、震災を体験したり、ボランティアとして活動したりした人が多い¹³。また、来館者の半数近くは、修学旅行、遠足など校外学習の小中学生である。

図表3 来館前後の「震災と聞いて思いつく3つの言葉」(上位5つ)

来館前		来館後	
震災と聞いて思いつく言葉 (上位5つ)	合計 (回)	震災と聞いて思いつく言葉 (上位5つ)	合計 (回)
火災・火事	207	火災・火事	208
地震	197	地震	136
家	42	人	47
死者	40	死者	44
大地震	38	ボランティア	40

(出所) 高野 尚子=渥美 公秀「語りによる阪神・淡路大震災の伝承に関する一考察：語り部と聞き手の協働想起に着目して」『ボランティア学研究』8号 2008年2月、106頁

「人と防災未来センター」における小中学生を対象としたアンケート調査結果によれば、調査対象の小中学生が「震災と聞いて思いつく言葉」は、語り部の話を聞く前と後では変化があることがわかった(図表3)¹⁴。語り部の話は、「自分や自分の周囲の人の被災体験」に関する私的なものが多い。語り部の話を聞く前の「震災と聞いて思いつく言葉」は、「火災・火事」「地震」など「震災で物も人も大きな被害を受けた」という抽象的なイメージを表す回答が多い。語り部の

話を聞いた後では、「人」「ボランティア」など「生きた人間」をイメージした言葉が挙げられることが多くなる。

語り部の話の中では、究極の状況下での「命の大切さ」「助け合いの大切さ」や「防災のための具体的な知恵」が述べられる。「防災のための具体的な知恵」として例えば、自宅の耐震補強の必要性が来館者に抵抗なく受け入れられて、メモリアル施設の売店で販売されている家具転倒防止装置などの防災グッズの購入に至ったりする¹⁵。

また、究極の状況下での「命の大切さ」「助け合いの大切さ」に関する語りを聞き、聞き手は震災の中に人々の暮らしがあったことを具体的に知ることになる。例えば、語り部の話を聞いた小学生が「いつか地震が来て、残してあった最後の水を困っている人にあげられるかな」とアンケートへ回答したように、災害が他人事ではなく我が身に降りかかるかもしれないことの想起や、そのような場合の自分の行動についての「懐疑やとまどい」がみられるという。語り部の話に「懐疑やとまどい」を感じた小学生が感想を親などに伝えることもあるだろう。校外学習の小中学生が、数年後に親や友人と一緒にモニュメント施設を再訪することもあるという¹⁶。

このようなメモリアル施設の建設には、計画段階からの住民参加が必要であることは勿論であるが、被災した人々の思い・記憶をより多く来訪者と共有するには、アートマネジメントやガイドの重要性が指摘されている¹⁷。

IV. 被災地観光の課題

被災地観光の課題として、リピーターが少ないことが指摘されている。6千人以上が亡くなった阪神・淡路大震災の被災地には、多数の慰霊碑が建てられた。このような震災モニュメント巡りのための地図が作成され、ガイドブックも出版されている¹⁸。

「1.17ひょうごメモリアルウォーク」は、毎年、震災発生日である1月17日に行われている。「1.17ひょうごメモリアルウォーク2014」は、交通機関が途絶した大震災時の追体験を行い、震災から19周年を迎え風化しがちな防災意識を新たにするとともに、来るべき災害に備えるため、震災モニュメント巡りや緊急時の避難路、救援路として整備されている山手幹線等を歩く5～15キロメートルのコースに計3,100人が参加した¹⁹。同日に「1.17ひょうごメモリアルウォーク」の同じコースの範囲内で事務所・学校などの単位で行われた帰宅訓練ウォークにも300人が参加した。

被災地観光のリピーターを増やすために、例えば、震災ボランティアとして被災地を訪れたことがある人々に働きかけることも提案されている²⁰。東日本大震災の被災地を中心として、環境省によって青森県八戸市から福島県相馬市までの約700キロメートルを結ぶ「みちのく潮風トレイル」の整備が進められている(図表4)²¹。トレイルとは、森林や原野、里山などにある「歩く

図表4 みちのく潮風トレイルの位置概略



(出所) 環境省ホームページ

ための道」を指す。ルート設定のためモニターとして被災地を歩いた学生は、700キロメートル踏破に延べ50日間かかった。踏破した学生は「(被災した沿岸の)町がきれいになるまで何回でも歩きたい。若い人が東北に行く機会として、トレイルを利用してほしい」と話している²²。

V. おわりに

Ⅲ. で述べたように、語り部から災害の経験を直接聞くことによって、「命の大切さ」「助け合いの大切さ」や「防災のための具体的な知恵」が教訓として次の世代に伝わる。世界中のマグニチュード6以上の大地震の約4分の1は、日本で起こっている。日本人は、一生に一回、何かしら大きな災害に遭遇すると言っても過言ではない。災害を他人事にするのではなく、自分も当事者となりうるという感覚を持てるような仕組みづくりが重要である²³。

「土手の花見」が防災上の工夫だという説がある²⁴。梅雨の増水時期を前に、大勢の人による踏み固めという形で、自然に楽しみながら防災を実現する仕組みだという。東日本大震災の被災地への観光も、被災者による「語り部」活動、歩く観光など、物語を感じたり、癒されたり、楽しみを感じたりしながら、災害の教訓が次世代に伝わるようなかたちとして今後とも工夫されることが必要である。

謝辞：本研究の一部は、JSPS 科研費 26510017 の助成を受けたものである。

参考文献

- 坂本真由美「バンドアチェにおける被災者の災害対応行動と災害観に関する実態調査－被災経験の語り継ぎのために」林勲男編著『自然災害と復興支援』明石書店、2010年1月、307～330頁
- 佐藤久子「東北海岸トレイル構想モニターツアーに参加して」
〈<http://www.tozans.justhpb.jp/inkai/2012moniter.pdf>〉 2014年9月28日アクセス。
- 震災モニュメントマップ作成委員会＝毎日新聞震災取材班編著『震災モニュメントめぐり』葉文館出版、2000年1月
- 世界のジオパーク編集委員会ほか編『世界のジオパーク』オーム社、2010年8月
- 総合観光学会『復興ツーリズム：観光学からのメッセージ』同文館出版、2013年3月
- 高木秀雄『〈早稲田大学ブックレット「震災後」に考える〉シリーズ013 三陸にジオパークを——未来のいのちを守るために』早稲田大学出版部、2012年4月、56～82頁
- 高野 尚子＝渥美 公秀「阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察 - 対話の綻びをめぐって - 」『実験社会心理学研究』46巻2号、185～197頁、2007年
- 高野 尚子＝渥美 公秀「語りによる阪神・淡路大震災の伝承に関する一考察：語り部と聞き手の協働想起に着目して」『ボランティア学研究』8号2008年2月、97～119頁
- 高橋和雄編『東日本大震災の復興に向けて－火山災害から復興した島原からのメッセージ－』古今書院、2012年1月
- 中西正司＝上野千鶴子『当事者主権』岩波書店、2003年10月
- 奈良林和子「ワイド3・11「2年後の人災」仙台発！被災者語り部タクシーの150日」『サンデー毎日』第92巻第10号（2013年3月17日増大号）、167～168頁
- 沼田真一編著「新たなツーリズムの構築」早田宰ほか編著『〈早稲田大学ブックレット「震災後」に考える〉シリーズ032 ともに創る！まちの新しい未来——気仙沼復興塾の挑戦』早稲田大学出版部、2013年8月、68～103頁
- 平井康嗣「被災と記憶：語り継ぐことの難しさ 被災者と風化に向き合う新聞社『河北新報』「震災遺構」と「語り部」」『週刊金曜日』第20巻第42号（2012年11月2日）、26～28頁
- 深見聡＝井出明編『観光とまちづくり』古今書院、2010年4月
- 矢守克也『増補版〈生活防災〉のすすめ 東日本大震災と日本社会』ナカニシヤ出版、2011年7月
- 矢守克也ほか編著『防災・減災の人間科学』新曜社、2011年1月
- 矢守克也『アクションリサーチ 実践する人間科学』新曜社、2010年6月
- 矢守克也『防災人間科学』東京大学出版会、2009年9月
- 矢守克也「博物館における震災体験の記憶と伝達—「北淡町震災記念公園（野島断層保存館）」をめぐって—」『奈良大学大学院研究年報』7号、2002年、331～358頁

注

- 1 復興庁「全国の避難者等の数」平成26年8月29日〈<http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/hinanshasuu.html>〉2014年9月28日アクセス。
- 2 公営財団法人助けあいジャパンは、「助けあい」の理念に立ち、震災や災害などを支援する方々をサポートし、もって事故や災害の防止及び事故や災害後の復興を支援することを目的として、東日本大震災直後に阪神大震災の被災者が当時の官房副長官にメールを出し、民に官が情報を提供し発信するサイトを提案したことから設立され、全員民間出身のメンバーが運営している。
- 3 助けあいジャパン旅して応援 復興応援・スタディツアー 〈<http://tasukeaijapan.jp/?cat=212>〉 2014年9月28日アクセス。
- 4 三陸被災地フロントライン研修 〈http://www.sanrikutetsudou.com/wp-banner/2011_/frontline.pdf〉 2014年9月28日アクセス。
- 5 公益財団法人東京観光財団 〈<http://www.tcvb.or.jp/ja/fukushima/>〉 2014年9月28日アクセス。
- 6 国土交通省「平成25年版 観光白書」平成25年6月11日、14頁。
- 7 ユナイテッド・アース南三陸町支援映像「語り部ガイドプロジェクト」〈<http://youtu.be/ONG-Yj5dbDA>〉 コメント欄 2014年9月28日アクセス。
- 8 矢守克也「博物館における震災体験の記憶と伝達—「北淡町震災記念公園（野島断層保存館）」をめぐって—」『奈良大学大学院研究年報』7号、2002年、346、356～357頁は、平和記念資料館（広島市）、土石流災害遺構保存公園（雲仙普賢岳）、戦艦アリゾナ記念館（ハワイ）を挙げている。
- 9 人と防災未来センター「平成25年度年次報告書」。
- 10 高野 尚子＝渥美 公秀「語りによる阪神・淡路大震災の伝承に関する一考察：語り部と聞き手の協働想起に着目して」『ボランティア学研究』8号2008年2月、103頁、高野 尚子＝渥美 公秀「阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察 - 対話の結びをめぐって - 』『実験社会心理学研究』46巻2号、186～187頁、2007年。
- 11 奈良林和子「仙台発！被災者語り部タクシーの150日」『サンデー毎日』第92巻第10号（2013年3月17日増大号）、168頁。
- 12 矢守克也ほか編著『防災・減災の人間科学』新曜社、2011年1月、139頁。
- 13 矢守・前掲注8、345頁。
- 14 高野＝渥美・前掲注10、2008年、105～112頁。
- 15 矢守・前掲注8、349頁。
- 16 高野＝渥美・前掲注10、196頁。
- 17 井出明「災害復興と観光」深見聡＝井出明編『観光とまちづくり』古今書院、2010年4月、196～197頁。
専門性の高いガイドの役割は、来訪者が理解しやすいように被災した当事者の語りを解釈し、解説を加えることにあると言われる。しかし、ガイドによって、既存の枠組みを意識した一定の解釈が被災した当事

者の語りに加えられる可能性もあることに注意が必要である。

- 18 震災モニュメントマップ作成委員会＝毎日新聞震災取材班編著『震災モニュメントめぐり』葉文館出版、2000年1月。
- 19 1.17 ひょうごメモリアルウォーク〈<http://www.19950117hyogo.jp/gathering/>〉 2014年9月28日アクセス、矢守克也『防災人間科学』東京大学出版会、2009年9月、143～145頁。
- 20 沼田真一編著「新たなツーリズムの構築」早田幸ほか編著『〈早稲田大学ブックレット「震災後」に考える〉シリーズ032 ともに創る！まちの新しい未来——気仙沼復興塾の挑戦』早稲田大学出版部、2013年8月、79、96頁。
- 21 環境省みちのく潮風トレイル（旧東北海岸トレイル）〈<http://www.tohoku-trail.go.jp/index.html>〉 2014年9月28日アクセス。
- 22 日本経済新聞 2013年3月17日 〈http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG1602Q_W3A310C1CC1000/〉 2014年9月28日アクセス。
- 23 広瀬敏通「災害から学ぶ『被災地ツアー』」総合観光学会『復興ツーリズム：観光学からのメッセージ』同文館出版、2013年3月、52、58、59頁。
- 24 矢守ほか編著・前掲注12、243頁。